

## 「看護師の直観水準の評価」

Rovithis, Michael et al. (2015) "Evaluation of Intuition Levels in Nursing Staff." *Health Science Journal*, Vol.9 No.3 : 4, pp.1-7.

法政大学大学院 山崎 雅夫

今日において、「直観」を科学することが進んでいる。なぜ直観が注目されるのであろうか。看護師は、多くの患者さんを相手に時間が限られる中で、一気に大量の情報を処理し意思決定を行なわなければならない。看護実践研究においてはこの点に着目し、直観という能力の重要性を説いている。直観の研究の歴史は長い。哲学では、プラトン、アリストテレスから始まり、デカルト、スピノザ、カント、シュライアマハー、フッサール、ベルクソンを経て、現代ではボランニー、ドレイファス兄弟などによって定義されている。心理学では、ユング、クレイン、カーネマンなどが言及している。学際研究では、Norman, D. A., Spelke, E.S., Carey, S., Atran, S., Premack, D., Lewis, D. K., 合原一幸・神崎亮平、伊藤光弘、理化学研究所 脳科学総合研究センターなどが言及している。このように様々な専門領域で直観の研究がなされている。ここでは近年、研究成果の蓄積がある看護師の直観について紹介し、直観研究の動向についてみていくものとする。

看護師の直観については、Benner and Tanner (1987) が始まりである。Benner and Tanner は、科学的根拠に拠らない看護師の感覚を「直観」と呼び、「直観は神秘的なものではなく、明確な根拠なしに、また判断の中身すべてを明らかにすることなく物事を知ること」と述べ、臨床判断に不可欠な基本的概念として位置づけている。この時代は、ドレイファス兄弟 (1986) による直観の概念の展開が先端を行っていた。現在でも、世界中で直観の研究は続いている。日本であれば、山田理絵 ほか (2007) が比較的新しいところであろう。今回紹介する Rovithis, Michael et al. (2015) は、直観の定量化に取り組んでいるものである。

直観は、看護実践において重要な要因となっている。世界的にも看護実践における直観はいくつか定義されている。Rovithis, Michael らは直観を、知識の非線形手順だとし、3つの基本的な要因を整理している。3つの基本的要因とは、「感情的な気づき」「物理的な気

づき」「物理レベル・精神レベルでのつながり」である。

感情的な気づきとは、感情的な要因に由来するものである。看護師が患者の状態をみていく中で、感情移入し、気づいていくものとされる。物理的な気づきとは、五感からだけでなくその機能を越えて気づくものとされる。物理レベル・精神レベルでのつながりとは、物理的または精神的レベルでの患者とのつながりが直観を発揮させるものとされる。つまり彼らの定義する直観は、感情的レベル・物理的レベル・精神的レベルの3つによって構成されるわけである。

しかし、この概念は認められてきたものではない。この概念を認めるに足る証拠がないのである。ただし、いくつかの研究には、この概念を認め、その能力によって看護師は成長するのであるとするものもある。この研究の目的は、定義した直観が必要な能力であることを証明することである。対象として、救命救急センター、集中治療室、大学総合病院外科の看護師の直観水準を比較している。比較は、ギリシャのイラクリオン地区の2つの病院によって行われている。

直観の測定にあたっては、スミス直観水準測定法を採用している。調査対象は、122名の看護師である。データは、2013年の9～10月の2カ月間で収集されている。設定された問は、以下の4つである。

- (1) 救命救急センターの看護師の直観水準はどのくらいあるか。
- (2) 集中治療室の看護師の直観水準はどのくらいあるか。
- (3) 大学総合病院外科の看護師の直観水準はどのくらいあるか。
- (4) 部署による看護師の直観水準に違いはあるか。

スミス直観水準測定法とは、アラバマ大学准教授 Smith, Anita Joel によって、2007年に開発されたものである。スミス直観水準測定法は、看護師の人口統計学的特性に関する問題が5問と4つの属性に分類される問題18問によって構成される。人口統計学的特

性には、性別、年齢、資格、所属部署、経験年数などが含まれる。18の問題は、例えば、不快な感覚であったり、物理的な感覚であったり、精神レベルでの接続などの要素が含まれる。回答は、リッカート尺度に基づき5つから選択するようになっている。5つの選択肢とは、①ある、②どちらかというところ、③どちらともいえない、④どちらかというところ、⑤ない、である。直観水準は、これらの問題への回答結果から算出される。直観水準は、以下のように等級づけられる。

直観水準（低）： 18-42

直観水準（平均）： 43-66

直観水準（高）： 67-90

なお、アンケートの信頼性を確保するために、3週間に1度の間隔で抜き出した10名を再評価している。再評価の対象となった看護師は、回答結果に基づく信頼性指標が0.871であった。再評価後は、0.899である。さらに、4つの質問に対して評価したものを、2つの期間の点数で比較している。研究全体としての信頼性指標は、0.895である。

調査対象の詳細は次の通りである。122名の看護師の男女比率は、女性77.9%（95名）、男性22.1%（27名）であった。資格面では、看護師74.6%（91名）、准看護師25.4%（31名）、所属部署では、救命救急センター23.8%（29名）、集中治療室32.0%（39名）、大学総合病院外科44.3%（54名）である。

この研究において看護師の直観水準は、53.2と平均水準であった。注目すべきは、直観が、感情的な気づきより、物理レベル・精神レベルでのつながりに左右されていたことである。これは、アンケートの質問事項に分けると正の相関性がみられた（ $p$ 値 $>0.001$ ）。アンケートデータ解析の詳細は、以下の通りである。物理的または精神的レベルでの患者とのつながりに関しては、最も高い数値を示した（ $p$ 値 $=0.535$ ）。回答の分布としては、①ある、②どちらかというところ、が高い割合であった。①ある、②どちらかというところ、の合計が37.0%（45名）で、③どちらともいえない、が38.7%（47名）で、④どちらかというところ、が30.3%（37名）である。また、属性「感情の悪さ」や「精神安定」では反対の結果が示された。「感情の悪さ」では、③どちらともいえない、④どちらかというところ、の間に分布し、「精神安定」では、④どちらかというところ、⑤ない、の間に分布する結果となった。

所属部署における看護師の直観水準は、救命救急セ

ンター53.2、大学総合病院外科53.3、集中治療室49.9である。資格ごとの直観水準は、看護師51.0、准看護師55.7である。中でも、「精神安定」の項目では、看護師が $p=0.043$ だったのに対して、准看護師では $p=0.047$ と高い直観水準の数値を示した。経験年数が直観水準に与える影響については、5～10年で直観水準49.6、11～15年で直観水準54.8という結果であった。つまり、所属部署や経験年数による直観水準の高さについては、統計的に優位な差異はみられなかったことになる。さらに、偶然ではあるが、准看護師の方が看護師よりも高い直観水準をもっていることも示された。

結論として、看護師の直観は、医療現場における看護師の意思決定に不可欠な要素であると導き出されている。スミス直観水準測定法は、この研究で初めて使われたものである。看護実践における直観に関する研究の蓄積はあるが、あらためて直観の存在を確かにするものとなった。研究蓄積として、グラウンデッド・セオリーを採用した研究による結果から看護実践における直観の重要性を示唆しているものもある。これは、オーストラリアで262名の看護師を対象に行われたものである。また、別の研究では、卓越した救命救急の看護師14名に調査し、直観の存在が確認されたものもある。

このように「直観」を科学することが進んでいる。現時点で、直観を正確に捉えることはできていない。しかし、あらゆる分野から直観に関する知見を集めていくことで帰納的に導き出されるものだと考える。今後、実践的な直観に関する研究はより一層加速するであろう。なぜなら「直観」は、人間にとって必要な能力だからである。近くまで来ている未来の現実のために。

#### 参考文献

- 山田理絵・泉キヨコ・平松知子・加藤真由美・正源寺美穂（2007）「臨床看護師の直観と病院、経験年数、職種との関連性の検討」『日看管会誌』Vol 10, No 2, pp.40-47.
- Benner, P. and Tanner, C. (1987) "How Expert Nurses Use Intuition" *American Journal of Nursing*, 87, pp.23-31.
- Dreyfus, Hubert L. and Dreyfus, Stuart E. (1986) *Mind over Machine: The Power of Human Intuitive Expertise in the Era of the Computer*, Free Press.

やまさき・まさお 法政大学大学院職業能力開発研究所 特任研究員。最近の主な著作に「技術者直観形成のための5つの方法による循環」『キャリアデザイン研究』（日本キャリアデザイン学会、2015）。人材育成論・人的資源管理論・労使関係論専攻。